

グローバル教員養成プログラム「ルワンダの小学校, 中学校, 大学視察」 の実施報告

Exchange Visit of Elementary School, Secondary school, University of Rwanda

眞鍋志野, 谷川夏菜子, 南野敏男, 日下智志

Shino MANABE, Kanako TANIKAWA, Toshio MINAMINO, Satoshi KUSAKA

鳴門教育大学

Naruto University of Education

1. 背景・目的

本稿は、鳴門教育大学が実施する令和5年度グローバル教員養成プログラム「ルワンダの小学校, 中学校, 大学視察」の活動報告である。本プログラムの主な目的は、ルワンダの公立学校の教員・生徒、さらにコミュニティ関係者と、学校教育のあり方について日本の事例も紹介しながら協議し、共に考えることであった。

2. プログラム参加者

- (1) 眞鍋志野 (鳴門教育大学学校教育学部小学校教育専修英語科教育コース4年)
- (2) 谷川夏菜子 (鳴門教育大学大学院学校教育研究科グローバル教育コース 修士課程2年)
- (3) 南野敏男, (鳴門教育大学大学院学校教育研究科グローバル教育コース 修士課程2年)
- (4) 日下智志, 引率者 (鳴門教育大学大学院学校教育研究科グローバル教育コース)

3. 日程

- (1) 6月17日 日本出国
- (2) 6月18日 ルワンダ到着
- (3) 6月19日 Fawe Girls' Gahini 中学校視察
- (4) 6月20日 GS Mukarang 中学校視察, コミュニティで平和教育ワークショップ
- (5) 6月21日 Rukara コミュニティで平和教育ワークショップ
- (6) 6月22日 ルワンダ大学視察
- (7) 6月23日 Nyamata 教員養成校視察, 虐殺博物館見学
- (8) 6月24日 ルワンダ出国

(9) 6月25日 日本帰国

4. 学校視察・授業観察

4.1. 私立中学校視察

我々が訪れた中学校は、私立の全寮制の女子高であった。ルワンダには、通常のように生徒が家から通う学校と、生徒が学校の敷地内に住み込んで学校に通う、全寮制の学校がある。現地の先生によると、全寮制では高等な教育を受けられるため志願者が多く、倍率が高いとのことであった。大学進学のために、より質の高い勉強ができる環境を求める様子は、現在の日本と同じような状況であると感じた。学校にはパソコン室があり、ほとんどの生徒が一人1台のパソコンを使えるようになっていた。生徒たちは、インターネットで何か調べたいものを検索したり、プログラミングのScratchを使ってコードを立てたりするなど、パソコン操作に慣れている様子であった。だが、椅子の数は十分ではなく、一つの椅子に二人で座る様子が頻繁に見られた。

我々はそれぞれ、日本文化を伝える授業を行った(図1)。授業では、日本の地理的な場所や国旗の意味、伝統衣装や日本の食べ物などを簡単に紹介し、最後に折り紙をした。彼らの学校生活について紹介してもらうと、朝学校が始まる時間は8:30で日本と同じであったが、生徒たちは5:30に起き、6:00に家を出てバスで学校に通っているということであった。給食や清掃の時間があるのは日本と同じであった。日本の学校給食を紹介すると、その種類の多さやおいしそうに見える目に変盛りが上がっていた。また、ルワンダは環境に気を遣っている国で、毎月4週目の土曜日は朝7時から11時まで仕事が休みになり国民全員で掃除をするという制度がある。さらに、ビニール袋は禁止であり、

お店では紙袋が使われる。だが、ルワンダではゴミの分別はしないようで、日本の分別方法である燃やせるごみ、燃えないごみ、プラスチック類、びん、缶、ペットボトルなどを紹介すると、生徒たちはその多さに驚いていた。また、ひらがなを紹介した際には、熱心にノートに書き写して（図2）、自分の名前をひらがなで書いてみたいという声が多く上がった。授業後には日本語で「ありがとう。」と伝えてくれ、「日本に行ってみよう。」という生徒が沢山出てきて文化交流の意義を感じた。



図1. 日本文化を紹介する様子。

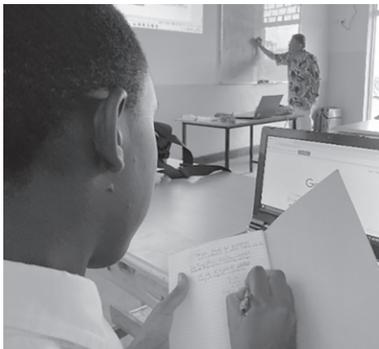


図2. 熱心にメモを書く生徒。

4.2. 平和教育ワークショップ

訪問期間中は、1994年にルワンダで虐殺が行われていた時期であったことから、各学校において「Kwibuka29」と書かれた看板が見かけられた。「Kwibuka」とは、キニアルワンダ語で「記憶する」という意味であり、29の数字は、1994年の虐殺から29年が経過したことを示している。1994年の4月、ルワンダ全国においてフツ族の人々が、ツチ族や、虐殺の参加を拒否したフツ族恩恵派の人々を殺害し、たったの3か月で100万人以上の人々が亡くなったと言われている。滞在中はキガリの虐殺記念館と首都郊外にある虐殺記念館にも訪問し、ルワンダの虐殺の歴史を学んだ。首都郊外の記念館では、襲撃された協会や、殺害された人々が当時着用していた服装がそのま

ま展示してあり、当時の悲惨な状況をより深く知ることができた。私達は、Rukara コミュニティで平和について協議する活動に2日間にわたり参加した。1日目は虐殺に加担した側（キラー）とその被害者（サバイバー）が集まる会において、虐殺当時を経験した人々の生の声を聴くことができた。話を聴くなかで、それぞれの持つ悲しみや苦しさは、私たちには簡単には想像がつかないものであった。このコミュニティでは、キラー側もサバイバー側もお互いに理解し合い、過去の過ちを認めて、未来のためにPeace makerとして進んでいこうという前向きな姿勢が見られた。しかし、ルワンダには、まだまだ深く辛い悲しみを持った人々は多く存在しているということを忘れてはならない。5年前からこのコミュニティを運営している男性は、コミュニティに参加するまでは、キラーを許すことはできなかったと教えてくれた。「心の奥から相手を許すことは本当に難しいことだ。（相手を）許すことが最初のステップである。」と言っていた。街中を見ると一見、陽気で楽しそうな人々が多く見かけられるが、それぞれに虐殺の悲しい記憶があるということを私たちは知っておくことが大切であると強く思った。2日目は、このコミュニティに平和クラブとして参加している近隣の学校に通う子ども達と交流をした。この子どもたちは、虐殺を経験した親や祖母たちを持つ世代である。彼らの話から、今後二度と同じ過ちは起こさない・起こさせないために、自分たちが平和のために行動を起こしていくというとても強い意思を感じることができた。ルワンダでは、若年層が人口の多くの割合を占めており、次世代への平和教育を重要視しているようであった。

私たち学生は、このコミュニティにおいて日本の広島の実験について話を聞いた（図3）。ルワンダの人々にとって、原爆の人体への影響や、現在のアメリカと日本の関係はどうなっているのかが気になる様子であった。また、活動の最後には話の中で、病気と聞



図3. 平和教育ワークショップ。

いながら折り鶴を折った佐々木禎子さんについて紹介したことから、コミュニティのみんなで平和を願って折り鶴を折った。最初は固い表情だった参加者たちも折り紙を通して、次第に笑顔が増えていき、完成した折り鶴を大切に握りしめていた。

このコミュニティに参加したことで、ルワンダと日本の持つ悲しい歴史はそれぞれ異なるが、お互いに今後平和な社会を創っていくために次世代に歴史を伝えていくこと、自分で行動を起こしていくことの大切さを改めて認識することができた。

4.3. 教員養成校視察

私たちが訪れた日はテストだったため、生徒は長時間のテストに励んでいた。日本のテストは一科目50分程度であるが、ここでは一科目3時間程度かかると聞き、驚いた。また、校長先生に話を聞くと、ルワンダの教師も日本の教師のように勤務時間が終わっても夜遅くまで学校に残って仕事をする先生が存在するようで、人を育てる仕事、教師の業務量の多さは国が違っても共通するものがあると感じた。テストが終わった後には、生徒20名程と話す機会を設けて頂き、様々なことを質問した。驚いたことは、将来の夢を聞いた際、教師ではなく、他の職業を言う生徒が少なくなかったことである。教師になることがゴールではなく、様々な視点から人生を楽しもうとしている様子が分かり、生き方について考えさせられた。全寮制のため、なかなか実家に帰ったり家族に会ったりすることはできないようだが、お祈りやスポーツ、友だちとの時間などそれぞれの形で教員養成校や寮での生活を楽しんでいるようだった。洗い物や洗濯は役割分担をして、みんなで協力して行い、掃除の時間も毎日あるそうだ。

4.4. 虐殺博物館見学

市内にある虐殺博物館を訪れ、20年前に起きた大虐殺について学んだ。現地の人々は勿論、世界各国から多くの人々が博物館に訪れており、多言語に通訳できる機械を借りることもできた。この虐殺はツツ族とツチ族の民族対立に端を発し、多くの人々が亡くなった。博物館には当時の教会があり、その屋根には銃で襲撃された跡がしっかりと残っていた(図4)。教会の中には亡くなった人々の遺留品が積み上げられており、中には血のついた服や爆発により燃え焦げた小物、爆風や銃弾により変形した金属などもあり、当時の恐ろしい様子が伝わってきた。地下には虐殺により亡くなった方々の遺骨が埋葬されていたが、あまりにも死者数が多く、一つの棺あたりに複数人の遺骨を入れるだけ詰め込むしかなかったそうだ。銃で撃たれた穴がぽっかりと開いた頭蓋骨やナタなどで襲われたた

う割れ目の入った頭蓋骨もあった。乳児のような小さな頭蓋骨も少なくなく、虐殺の無惨さが伺えた。虐殺によってルワンダは、経済的、精神的、物理的、あらゆる側面で大きな打撃を受けたにも関わらず、今では平和で穏やかな暮らしができるまでになっている。ルワンダはわずか20年で大きな復興を遂げ、これは「アフリカの奇跡」と言われている。



図4. 銃撃された教会に残る弾痕。

5. おわりに

本研修の成果は大きく次の三点である。一点目は、平和教育について考えを深められたことである。ルワンダと日本の平和について意見交換をしたことで、私達日本人の戦争に対する感覚を改めて見つめ直すことができた。日本は、広島と長崎に原爆が落とされてから約80年が経とうとしている。近年では、戦争体験者の高齢化から当時の話を聞くことは難しくなっており、テレビなどにおいても戦争の話題が減ってきているように感じる。ルワンダの人々の話を聴く中で、現在の日本人たちにとって、戦争はどこか遠い歴史となり、自分事としては捉えられなくなってきているのかもしれないと感じた。そのため、私達は原爆が落とされたという歴史のある日本人・次世代を育てる教員として、平和教育を後世に伝えていくという大きな責任があると改めて思った。二点目は、日常への感謝の気持ちを再認識できたことである。日本では蛇口を捻れば安全な水が出てきたり、各家庭に電気や水道が通っていたり、学校には一人一つの椅子や机が用意されていたりすることは、一見当たり前のことである。だが、ルワンダでは頻繁に停電が起きたり、安全な水の確保が難しかったり、十分な教材や設備がなかったり、という現実があった。そんな中、一生懸命学びに向かう子どもたちの姿や朝早くから水やバナナを楽しそうに運ぶ青年の姿に感銘を受けた。私たちが生きている世界や環境を当たり前と思うのではなく、何事にも感謝

の気持ちを忘れず、自分の周り以外にも目を向けようとする姿勢を持ち続けることが大切であると感じた。三点目は、日本について学ぶ必要性を感じられたことである。交流等の際に日本についての質問を多く受けたが、私たちが答えられないものも少なくなかった。例えば、平和教育ワークショップで「なぜアメリカは日本に原爆を落としたのか。」と聞かれた際、私たちはその理由を明確に答えることができなかった。日本が私たちの母国でありながら日本について深く向き合

えていなかったことに気付かされ、日本人として生きていく上で日本に目を向け、知ろうとする姿勢を大切にしたいと思うようになった。

最後に、このような貴重な機会を与えていただいた日下智志先生をはじめ、鳴門教育大学学生課国際交流係、教員教育国際協力センターの方々、現地でコーディネートをしていただいたクロウド先生、ピエール先生をはじめとする多くのルワンダの方々に感謝を申し上げます。